



## 佐藤鐵太郎の国防思想に関する基礎的研究 [全文の要約]

著者	張 万拳
発行年	2019-03-31
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第742号
URL	<a href="http://doi.org/10.32286/00018658">http://doi.org/10.32286/00018658</a>

# 論文要旨

序論 「国防」とは何を意味するのか

国防というのは何だろう。

まず、国防の概念の定義を説明する。具体的な定義も同じではないが、一般的には外国の侵略から国を守ることは国防である。次に、人類は国防を手段として、いったい何を守っているのか、そしていったい何を守りたいのかという問題は、いっそう深く考えられる必要があると思う。簡単に言えると、国防はある範囲の土地や海洋や空を自分に属するものと見なして、他者から受ける脅威や侵入や略奪を退けてそれを自分のものとして維持しつづける後ろ盾であるか、若しくはこの範囲に存在しているある政権或はある思想・主義を他者からの干渉や破壊や転覆を退けて長期的さらに永遠に維持しつづけようとする後ろ盾であるかについてこの二つの問題は、よく混ぜていて統一されてしまう。興味深いのはその異同を分けて考察することである。

2000年に石川泰志先生は『佐藤鐵太郎海軍中将伝』を完成して、佐藤の生まれから死ぬまでの生涯を詳細に記している。しかし、筆者が佐藤の国防作品から分析してくる佐藤像は、石川の『佐藤鐵太郎海軍中将伝』が描き出してくる佐藤像との間で幾分違いが見られるからである。石川は佐藤の国防思想を大陸侵略主義から離れる平和的「島国海洋貿易国家論」として総括して高く評価する。しかし、筆者は関心を持っている幾つかの問題について、石川の作品のなかで答えが見つからない。すなわち佐藤は何の思想の下で国防を研究するか、彼はいったい何を守りたいのかはなかなか興味深いものである。そのうえ、佐藤の国防思想が若し実行できれば近代日本は対外侵略の道を辿らなく、あの戦争を避けられるという石川の結論はまだ検討の余地があると思われる。本論では、佐藤の国防作品に対する分析と通じて、石川の書いた佐藤像と違い、筆者が理解する佐藤像を描き出してみることにはしたい。

本論では、筆者はまず佐藤の国防作品すなわち『国防私説』、『帝国国防論』、『帝国国防史論』、『国防新論』の内容を詳しく分析して、違う時代において佐藤はそれぞれどのような国防思想を提出してきたのかを究明する。次に、佐藤の国防思想における主要な論点に対する評価をめぐって、石川の書いた佐藤像と比べながら、筆者が理解する佐藤像を描き出してみることにはしたい。そして、アジア太平洋戦争の終戦の時、日本の敗戦と結び、本論の初めに提起した問題いわゆる国防はいったい何ものを守っているのかという問題を答えてみることにしたい。最後には、佐藤に対して全体的に評価してみる。

第一章 佐藤鐵太郎の国防思想の発端——『国防私説』（1892年）をめぐって——

佐藤鐵太郎は、近代日本において有名な海軍国防戦略家と認められ、「日本のマハン」と称されている。佐藤の国防思想の全貌をつかむため、まずかれの国防思想の生まれた背景と、当時の海軍さらに日本の国防に及ぼした影響を検討する必要がある。佐藤鐵太郎は秋山真之とともに日本海軍の双璧であると記者に評価されて、日本当時随一の海軍戦略理論の名家であり、近代日本海軍国防思想の形成と発展に大きな影響を与えたと考えられている。しかし、残念なことに、戦後から現在まで彼の戦略思想に触れた研究は多いと思われない。勿論、今日の立場に立って思えば、彼の戦略理論は当時の日本の状況に全部適していたとは言えないかもしれない。なぜなら、彼のすべての国防観点は特殊な時代背景と日本国内外の実情の反映だったからである。このために、佐藤が育つ

た時代に遡り、同時期の日本及び日本陸海軍の実態を結んで彼の戦略思想の発端を考察してみることにしたい。

## 第二章 佐藤鐵太郎の国防思想の形成——『帝国国防論』（1902年）をめぐって——

明治建軍以来、日本の海陸軍は日本国防における各自の重要性と地位をめぐる競争が次第に激しくなってきた。周知のように、陸海軍の間でこのような対立と論争は日本の近代史を貫いて敗戦まで続いていたと考えられている。とくに、国防計画をめぐる陸海軍二元化は陸海軍の軍備拡大競争にともなう軍事予算の争奪戦を激化させ、この対立が昭和20(1945)年の敗戦まで日本の政治・軍事・外交を大きく左右することになる。当時の山本権兵衛海軍大臣は海主陸従の国防体系を作るため、西洋の優れる海軍国防思想を利用する必要があると考えた。これをきっかけとして、佐藤は山本海相から直接内命を受けて、「海主陸従」の国策を根拠づけるための学問的裏付けを作り上げようとする目的をもって駐在員としてイギリスへ赴いた。明治34(1901)年12月に帰国した佐藤は翌年の1月、海軍大学校教官となった。そして、山本海相は佐藤に海外での研究成果をちゃんとまとめて書き出して出版させた。佐藤の整理作業も相当に速く、かれの研究成果は明治35(1902)年3月1日に印刷されて11月5日に水交社印刷所に出版された。これは即ち『帝国国防論』の完成過程である。佐藤が『帝国国防論』をとおして提出してくる最も重要な国防観点は、イギリスを模範として日本海軍を中心とする国防体系を作り上げようとしたことである。かれのこのような考えと論説は防守自衛の立場に立ちながら、当時の陸主海従の国防体系に挑戦して、さらに陸軍の対外侵略の大陸政策に「国歩ノ寸進ヲ思フテ其ノ尺退ヲ知ラザルハ千古ノ通患」だという皮肉な批判を与えた。

## 第三章 佐藤鐵太郎の国防思想の成熟——『帝国国防史論』（1908年）をめぐって——

1908年、佐藤鐵太郎は海軍大学校で教鞭を執った間の講義を整理して、『帝国国防論』に基づいて戦例の追加、改定を行い、『帝国国防史論』として出版した。この本は佐藤鐵太郎の海軍国防思想の集大成であり、近代日本の海防思想の代表作だと高く評価されている。本章は、日露戦後の日本の陸海軍情勢に対する分析を通じて、『帝国国防史論』がどのような時代背景で出版されたのかを説明する。海主陸従の輿論を盛り上げる『帝国国防論』を完成した(1902年)後、佐藤鐵太郎は宗谷副長、巖島副長、出雲副長、常備艦隊参謀を務めた。そして、日露戦争で「当時海軍の少壮士官の中で用兵作戦の白眉と目せられていた」佐藤、秋山真之はそれぞれ第二艦隊参謀、聯合艦隊司令部参謀として輝かしい戦功をあげた。日露戦後、佐藤は竜田艦長を務め、そして1907年4月から海軍大学校教官となった。佐藤は『帝国国防論』を本にして日露戦争での戦場経験をいかして史例の追加、改定を行い、海大の甲種学生に海防史論の講義をした。終に、1908年9月30日に整理されるこの海大講義が『帝国国防史論』として水交社に出版された。1902年の『帝国国防論』と比較すれば、『帝国国防史論』の基本的論点、所謂防守自衛の国防観念と海軍中心の国防体系をめぐる両書は完全に一致する。それでは、一つ注意に値するところは、『帝国国防論』は当時の山本権兵衛海相の内命を受けた佐藤が調査して執筆した作品であるという経緯である。このような背景の中で、『帝国国防論』の完成は当時の陸主海従の国防体系を批判して、海主陸従の世論を喚起して海軍拡張の必要性に理論付けを提供する効果があったのである。そして、『帝国国防史論』が出版された時、日本の陸海軍情勢、国内外現状は日露戦争のため大いに変わってしまったのである。佐藤自身も日露戦争中の日本海海戦に参加して大勝利を

収めたため、島国の日本にとって海防・海軍・海戦・制海権の重要性はこれから言うまでもなく自明のことであると強く信じていた。

#### 第四章 佐藤鐵太郎の国防思想の完結——『国防新論』（1930年）をめぐって——

1929年に出版された佐藤鐵太郎の『国防新論』を通じて、佐藤がいったい何を守ろうとしているのか、どのように実現しようかなどの問題は明白に理解できる。石川泰志の完成した佐藤鐵太郎伝記の内容と非常に違っている佐藤像も自然的に現れてくる。その上、石川が見過ごした佐藤の海軍国防思想の底流も検討してみることにしたい。1930年に出版された『国防新論』は西洋への批判主義および中国への干渉主義を二つ顕著な特徴と言わなければならない。『帝国国防史論』（1908年）のなかで佐藤が日清連合によってロシアの南下に対抗する大陸政策を主張したことと違って、『国防新論』（1930年）において、佐藤は当時の中国の情勢に応じて大陸へ干渉主義を唱えるようになった。『国防新論』は佐藤の国防思想をもっと全面的に読者の目の前にあらわれてくる。『国防私説』（1892年）と『帝国国防論』（1902年）は主として海主陸従の国防体系の必要性と重要性を解き明かしてくる。それぞれは佐藤の国防思想の発端と形成と言えらると思う。しかし、佐藤の国防思想が本当に成熟していると評価できるのは彼の『帝国国防史論』（1908年）に間違いないと指摘できる。それはなぜかという点、『帝国国防史論』は前の作品より海主陸従論を論じるほかには、対外関係と国防との関わり、仮想敵国の確定と対策、陸軍の主導する大陸政策への批判、艦隊決戦主義および精神主義的国防論の展開、満韓問題と国防との関わりなどの方面について、全面的体系的に佐藤の国防思想を示しているからである。そして、『帝国国防史論』は国体擁護について何度も触れているが、必竟海主陸従論の宣伝を中心に展開されるから、国体護持論は佐藤にとっていったいどのような存在であるか、さらに彼の国防思想のなかでいったいどのような地位を占めているのかはまだ明らかではない。それで、『国防新論』（1929年）の内容をとおして、この問題が一気に解決できる。

『国防新論』は佐藤の以前の国防作品と違い、海主陸従論が意外に少ない紙幅を占めるのである。中では佐藤は、日本国体の唯一無二および日本人の国体護持の使命、最新文明としての日本文明の万能性を繰り返して説明して強調している。ここで、『国防私説』、『帝国国防論』、『帝国国防史論』においてあらわれる国体擁護の論説と結んで、さらに佐藤の熱烈な日蓮信仰を加えて考察してみると、佐藤がすべての生涯をかけて研究し続けている国防思想の出発点と帰結点はほかのものではなく、まさに国体護持であるに間違いなく指摘できらると思うのである。このポイントを把握できれば、佐藤の国防思想を全体的に理解しやすくなるようになってくると信じる。

#### 終章 佐藤鐵太郎の国防思想の本当の姿——石川泰志『佐藤鐵太郎海軍中将伝』再訪——

佐藤鐵太郎の国防作品に対する詳しい考察を通じて、佐藤の国防思想の中心は海主陸従論であり、出発点と帰結点は国体護持論であることが明らかに分かる。この二つの論点はどちらが欠けても佐藤の国防思想を正確に把握することができないといえるほど非常に重要である。本論の最後では、筆者はこれまで分析してきた佐藤の国防思想の本当の姿を究明して、総合的に評価してみることにしたい。そしてまた評価方法について、あらかじめ説明しておかなければならないのは、筆者はここで石川泰志先生が2000年に完成した『佐藤鐵太郎海軍中将伝』を対象にして考察を行うつもりである。なぜなら、筆者が佐藤の国防作品から分析してくる佐藤像は、石川の『佐藤鐵太郎海

『軍中将伝』が描き出してくる佐藤像との間で幾分違いが見られるからである。『佐藤鐵太郎海軍中将伝』を通して石川が繰り返して最も強調しているのは、佐藤鐵太郎は日本陸軍の主導する大陸政策にずっと反対していて、日本がイギリスに倣い島国海洋貿易国家を目標とすべきであると主張しているから、若し彼の国防思想が実行できれば日本は対外侵略の道を辿らないという論点である。より正確に言うと、石川の『佐藤鐵太郎海軍中将伝』は佐藤の国防思想を大陸侵略主義から離れる平和的「島国海洋貿易国家論」として総括して高く評価する。しかし、石川の佐藤研究に対して、筆者が関心を持っている幾つかの問題、すなわち佐藤は何の思想の下で国防を研究するか、彼はいったい何を守りたいのかは、石川の本のなかで答えが見つからない。そのうえ、佐藤の国防思想が若し実行できれば近代日本は対外侵略の道を辿らなく、あの戦争を避けられるという石川の結論はまだ検討の余地があると思われる。以下のように、佐藤の国防思想における主要な論点に対する評価をめぐって、石川が書いた佐藤像と比べながら、筆者が理解する佐藤像を描き出してみたい。

#### 補論 近世後期日本人の海洋観念と思想的系譜

旧日本海軍が明治維新後の日本人の近代国家の夢の一翼を担っていることは明白である。台湾出兵から真珠湾奇襲を経て終戦までの過程は旧日本海軍の海洋理念と海防政策の急劇な成功と悲劇的な破綻の物語を語っている。そして、ここで注意しておく必要があるのは、旧日本海軍の海洋理念と海防政策は単に明治以後で形成してきたものではなく、江戸後期或は幕末時期の日本で現れた海洋観念に深く関わっているところも少なくないということである。そのため、旧日本海軍の海防観念をよく理解しようとするれば、明治時代は言うまでもなく、明治維新前即ち幕末時期や江戸後期の日本人の海洋観念もよく整理して考察しなければならない。ここで筆者は、明治以前の林子平・本多利明・佐藤信淵などの兵学者や思想家の海洋観念、そして明治以後の稲垣満次郎・佐藤鐵太郎・小笠原長生など外交官や海軍軍人の海防観念に対する考察を通じて、日本人の海洋観念の変化および思想的系譜を明らかにしてみたい。